

別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

学生支援におけるピア・サポートの再考
—支援の対等性と相互性に着目して—

氏 名

植田 峰悠

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、大学において学生支援の基盤の一つとしての役割が期待されている学生相談機関の行う活動に着目し、本研究において再定義されたピア・サポートの視点を用いて、学生支援にピア・サポートの視点を取り入れることの意義と、ピア・サポートの視点を取り入れた新たな学生支援のあり方について検討することを目的とする。

本論文は、第1章から第5章までの5つの章で構成される。以下各章の概要を示す。
○第1章 学生支援におけるピア・サポートの現状と課題

本章では、まず学生相談が大学という場においてどのように発展してきたかについて整理した上で、2007年に日本学生支援機構より報告された「大学における学生相談体制の充実方策について—「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」—」における「学生相談の3階層モデル」を用いて学生支援活動の現状と課題について考察を行った。

その結果を受けて、近年様々な対人援助活動の領域において注目されつつある「ピア・サポート」の視点から現状の学生支援を振り返った。ピア・サポートの「Peer」には「同じ」「対等な」「仲間」といった意味が含まれ、「Support」は「支える・支持・支援・補助・応援する」といった幅広い支援という意味を持つ。これはただ支援を受けるだけでも、与えるだけでもない、相互扶助の両面が一体となった概念である。ピア・サポートという概念や名称に基づく活動の歴史について振り返りつつ、本邦の学生支援におけるピア・サポートの現状を整理した。また2000年以降、大学においては大学生が研修を受けて同じ学生の支援を行う「ピア・サポート活動」と呼ばれる活動が広く行われるようになりつつあり、支援を提供する側である学生相談カウンセラー同士でも様々な研修活動が行われている。しかし、大学生によるピア・サポート活動はその継続や波及に課題を抱えており、一方で学生相談カウンセラーの相互的な支援活動は困難事例等に対する研修活動が中心となっており、カウンセラー自身に焦点を当てた活動は数少ない現状があった。

上記をふまえ、本研究ではピア・サポートを「相互性と対等性を有する支援のあり方」として再定義し、論を進めることとした。対等性とは単に社会的な立場が同じことを指

すものではなく、同じ目的に向かって立場の上下や強弱の差がない者同士で相互にかかわりあいながら行われる支援のあり方をいう。そのため、学生同士や学生相談カウンセラー同士、あるいは教職員と学生相談カウンセラーといった、様々な立場による活動が想定される。近年大学で広く普及しつつある大学生によるピア・サポート活動は再定義されたピア・サポートの一形態とみなせることから、「学生ピア・サポート活動」として両者が弁別可能となるよう表記することとした。再定義されたピア・サポートの概念に基づいて、学生支援におけるピア・サポートについて再整理を行った。

その結果に基づき、学生支援にピア・サポートの視点を取り入れることの意義と、ピア・サポートの視点を取り入れた新たな学生支援のあり方について検討するという、本論文全体の目的が論じられた。

○第2章 大学生による学生ピア・サポート活動の運営における課題の検討

本章では、大学におけるピア・サポートとして最も代表的な存在である学生ピア・サポート活動を調査対象とし、学生相談機関が学生ピア・サポート活動を運営していく上で求められる視点について、再定義されたピア・サポートの視点を踏まえて検討を行った。

調査にあたっては、学生ピア・サポート活動を継続していく上で不可欠な要素となる、大学生ピア・サポーター（以下ピア・サポーター）の活動継続を促す要因をとりあげた。A大学のピアサポートルームに調査前年度より所属を継続しているピア・サポーター延べ99名を対象とし、現在の学生ピア・サポート活動の状況と課題について質問紙と半構造化面接を用いて尋ねた個別面談記録、及びメールを用いて依頼したウェブアンケート結果を基に分析を行った。

その結果、ピア・サポーターの活動継続に影響すると考えられる要因として「ピアサポーターとしての成長の実感」「他者を実際に支援する機会」の2つが見いだされ、学生ピア・サポート活動が学生自身にとっての成長促進的役割を担っていることが示された。しかし、一方で先行研究でも指摘されている大学全体への波及の難しさが改めて浮き彫りとなり、そのことについてピア・サポーター自身も同様に感じていたという結果が明らかになった。

○第3章 学生相談カウンセラーに必要なピア・サポートのあり方に関する検討

本章では、学生相談活動の担い手である学生相談カウンセラーを対象とし、学生相談カウンセラー自身にとってのピア・サポートのあり方について検討を行った。

まず、学生相談カウンセラーがどのような点で職務に困難を感じ、どのような支援が必要とされているのかについて明らかにするため、個々の学生相談カウンセラーがその職務に際し一人では解決が難しいと感じる状況を「学生相談カウンセラーが会う困難状況」と広く定義した。次に、そのような困難状況において有効と考えられる他者や組織からの種々の援助を「学生相談カウンセラーへのサポート」と

位置付け検討を行った。

方法としては、大学の学生相談機関にカウンセラーとして5年以上勤務した経験を持つ者5名を対象とし、グループディスカッション形式による調査を行った。最初に、カウンセラーの出会い困難状況にはどのようなものが存在するかについて全員が思いつく限り挙げ、KJ法を用いて整理した。その後、困難状況の各項目におかれたカウンセラーに対し、どのようなサポートが考えられるかについても洗いだし、その結果についてKJ法を用いて整理し、考察を行った。

学生相談カウンセラーの出会い困難状況について整理した結果、学生相談活動は職務環境という土台の元、学生相談に期待される役割という軸を持ち、それらを元に組織的な連携・協働を展開していくという学生相談活動のモデルが示された。また、学生相談カウンセラーへのサポートとしては、組織の中で得られるサポートの他に、一個人として受けるサポートや、必要な情報を得るといったサポートが存在し、それら全てにまたがる「カウンセラー同士のネットワーク」というピア・サポートの形が存在することが示され、より包括的な学生相談カウンセラーのためのピア・サポートの充実の必要性が論じられた。

○第4章 個別の学生相談活動をピア・サポートの視点から捉え直すための事例検討

本章では、学生相談機関の行うもっとも代表的な学生支援活動である、学生相談カウンセラーによる学生との個別学生相談事例をとりあげ、カウンセラーと学生とのピア・サポートという視点から日常の学生相談活動の展開について検討を行った。

その結果、学生とカウンセラーとが互いの意見を率直に語り合える関係へと変化していくなかで、学生自身に「対等な仲間」を求める気持ちが語られるようになり、相談室の外でのピア・サポートへの希求へとつながっていった過程が示された。学生相談という個別相談の場において、学生とカウンセラーとが同じ話題について対等に語り合う体験が積み重ねられていったことで、学生生活においても対等な立場で支え合える関係への希求が生じていったことが考察され、個別の学生相談活動が学生にとってのピア・サポート関係のモデルとして機能してきたことが考察された。

○第5章 総合考察

これまでの研究をふまえ、ピア・サポートの視点から学生支援を捉え直すことの意義がどこにあり、大学におけるピア・サポートの充実には具体的にどのようなことが求められているかについて検討し、ピア・サポートの視点を取り入れた新しい学生支援の形についても考察を行った。

多くの大学生にとって大学は最後の教育機関であり、卒業後はこれまでの学びを活かして様々なサービスの提供者となることが求められる。そのため、“自分たちのためにできることを考える”という視点を持ち、そのために行動すること自体が「支援」という概念を学生にとって身近で相互的なかわりを伴うものとして再構築するパラダイムシフトであり、重要な教育的意義を持っている。

また、大学生とは逆に学生相談カウンセラーは「専門家」としていかに“求められる”支援を適切に“提供する”かという視点から論じられることが多かった。しかし、彼ら自身もその職務に当たって多くの困難状況に遭遇しており、所属組織の内外における様々な人との関係に支えられることで初めて対応が可能になるものが数多く存在する。多くの人たちや組織とのかかわりの中で学生相談カウンセラー自身も支えられながら、学生一人ひとりに必要な支援を提供すること、その全てのエコシステムこそが、学生支援なのであり、よりよい支援のあり方を考えるためには、その全体を理解した上でかかわってゆくことの必要性が論じられた。

そして、本論文で得られた結果を踏まえ大学におけるピア・サポートの具体的な充実について考えると、学生ピア・サポート活動はそのミッションとして①ピア・サポートについての学び、②学生間での相互的な支援活動の展開、③ピア・サポーターコミュニティの持つセルフヘルプ機能、④大学コミュニティ全体の持つ相互支援機能の向上という4つの視点に基づき、①を基礎として順を追って活動を育んでいく必要性が論じられた。また、学生相談カウンセラーへの支援としては「個別の具体的な相談ニーズへの対応」、「学生相談カウンセラーとしてのアイデンティティ形成」、「職務環境の整備」、「組織社会化」といった④学生相談カウンセラーとしての働き方に関する支援と、「周囲から自分が大切にされる機会」、「自分自身を大切にできる機会」といった⑤学生相談カウンセラー自身のセルフケアの2側面による、学生相談カウンセラーを対象とした包括的なピア・サポートの必要性が論じられた。

上記により、ピア・サポートは学生と学生相談カウンセラーという異なる立場のそれぞれに学生支援を有効に機能させるための重要な役割を担っていることが明らかになった。両者は学生支援を「受け取る側」と「与える側」という決定的な立場の違いがあり、自身が支援を「する」と「受けること」の意味も大きく異なる。しかし、両者がその両面について意識しつつ日々の本分に取り組むことは、それぞれの活動の視野を大きく広げ、学生として・社会人としての成長を促す意義を持つ。ピア・サポートは自分自身と他者両方とのかかわりを見つめ直す機会として、学生支援において普遍的で不可欠な固有の意義を持つ関係性のあり方である。

学生支援は大学というコミュニティ全体が担う活動であり、大学人一人ひとりがコミュニティにおいて、「学生支援」というミッションのもと日常的に互いを対等な存在として尊重し合い、支え・支えられる体験を繰り返してゆく中で、学生へと支援が還元され、そのプロセス全体が学生の成長を促してゆく教育活動となる。一人ひとりの大学人が「支援」のもつ両面性に気づき、対等な存在として互いを尊重しながら相互的にかかわりあう大学コミュニティの文化を築いていくことが、教職員と学生が共に主体的に支え合う“学生支援のピア・サポートモデル”である。

今後、本モデルの精緻化と具体的な活動のための工夫を進め、今後の学生支援、大学教育や社会全体への活性化へとつなげてゆくことが望まれる。